

愛知・大淵遺跡

おおぶち

1 所在地 愛知県海部郡甚目寺町

2 調査期間 一九八五年（昭60）四月～一九八六年三月

3 発掘機関 愛知県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 梅村清春・宮腰健司・中野良法

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 弥生時代～鎌倉時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は濃尾平野の南西に位置し、海拔〇～一mの低湿地部に東西にのびる砂堆上に立地している。時期は、弥生時代・古墳時代後期



（名古屋北部）

・平安時代・鎌倉時代の四

期にわかれる。その中でも、

平安時代が遺跡の最盛期で、

甚目寺を中心とした村や街

道が周辺に広く展開してい

たものと思われる。

発掘調査は、名古屋環状

二号線の建設に伴い、一九

八三年から八五年の三カ年

の間、継続して行われた。木簡は、一九八五年に実施した調査区・

60 K区で、北西から南東に走る幅約一・八m、深さ約〇・六mの平

安時代（九世紀前半）の溝SD〇二上層より出土した。同時代の遺構

としては、掘立柱建物・井戸があり、建物の方位などからみて、八

一〇世紀の間に数回の造り替えが行われたと考えられる。SD〇

二は、遺跡の西側と南側に、建物の軸線にはほぼ沿うようにして走る

数条の溝のうちの一本で、集落の南限を画するものである。遺物は、

土器では土師器（甕・甑・鍋）・土錘・須恵器・灰釉陶器があり、木

器では井戸枠・曲物・下駄が出土している。なお、今回出土した木

簡は、古代に遡るものとしては県内で最初の事例となる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 物部 (225) × (18) × (6) 081

木簡は、上下が折れ、左右も荒く割ったままで、裏面も剝離したままになっている。全体に墨痕は薄い。

釈文に関しては、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

加藤優氏の御指導を得た。記して感謝したい。

9 関係文献

愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和六〇年度』（一九八六年）

（宮腰健司）